

当事者の声を聴きましたか？



学校の中では黒板・テレビ・教科書など見るということが多く求められます。しかし、最近の研究で、ロービジョン（弱視）やディスレクシア（読み書き障がい）など人の見え方は様々で、視力が著しく弱くぼんやりとしか形を捉えられない、視野の一部が欠けて見える、狭い範囲しか見えない、色の違いが分からないなど、抱えている課題は人それぞれ異なるということが分かってきました。昨年、書体デザイナーの高田裕美さんのインタビュー記事を目にしました。高田さん

は、もともと高齢者が広告を見やすいよう、高齢者向けのフォントを開発していたそうです。その時、ロービジョン研究の第一人者である慶應義塾大学の中野泰志先生と出会い、先生から「当事者の声を聴きましたか」というひとことにハッとしたそうです。そして、そのことがきっかけでロービジョンの児童と会い、授業の様子を参観し、必死に文字を読もうとしている姿から「何が何でもこの子たちに読みやすいフォントをつくらなければ…」と強く誓ったそうです。頭で想像したり、人から聞いた情報だけではなく、実際に現場に足を運び、自分の目で見ることによって間違っただけの思い込みに気づいたりします。最近、いろいろなところで“多様性の社会”と言われるようになってきていますが、大切なのは“誰かから聞いた情報ではなく自分の目で見る”ことの大切さを改めて考えさせられました。高田さんは苦節8年の年月をかけて **UD デジタル教科書体というフォントを開発**

したと言います。（←この部分がそのフォントです） 今まで文字を読めなかった子が「これなら読める！オレはバカじゃなかったんだ……」と言って皆で泣いてしまったそうです。私も含め、大人は自分の価値観を基準として判断しがちで本人がなぜできないのか？に思いを馳せることをしようとしにくい傾向が強いのではないのでしょうか。このことの裏を返せば、「文字が読めない」ということで苦しい思いをしている子がいるのだという現実を私たちは忘れてはならないと思います。そういった子が1人もいなくなるのが本当の意味の多様な社会であると思います。「UD デジタル教科書体」を使えばよいということではなく、「当事者の声を聴きましたか」という言葉を真摯に受け止めて行動できる人が広がってほしいと思いました。

（※今回は **UD デジタル教科書体**を分かりやすくするために敢えて丸ゴシック体で書きました。）

坂の途中で…

ある朝、校門を入った坂の途中で、2・3年生くらいの子がタオルのようなものを落としました。その子はそれを拾って坂の一番上のところにまで上がってきました。落としたのは絵具セットの中の筆やパレットを拭くためのものだったようです。たまたま近くにいた5・6年生の子と一緒に絵具セットをあけて一緒にタオルをしまっけてあげていました。朝からほのぼのとした光景を目にすることができ、5・6年生の子に「ありがとう」とだけ伝えました。